



『ユニオンジャックの矢 大英帝国のネットワーク戦略』

寺島実郎 著

NHK出版 1600円＋税



「視座」という言葉がとても印象的に響いてくる。この著者の好む言葉の一つである。視座。どつしりとした視覚上の軍事拠点にも聞こえる。見張り塔から外の世界の変化を観察するようなニューアンスがある。視座をもてるかどうか、あるいはどこにもてるかで見えてくるものばかりか、考え方や解釈、世界観まで違ってしまおうのだろう。

本書はイギリスに視座を置いている。イギリスから見えてくる世界について記述している。イギリスは大国であり、存在感のある国であるから、誰しもなにかがし知った気持ちになつてくる。もちろん私自身もそうであった。

けれども、本書を一読して、いかにイギリスを知らずにいたかを思い知らされることになる。いや、そのような言い方は正確ではない。いかに、知るべきでありながら知らなかったイギリスの実像があつたかに気付

かされた。

重要なものの一つが、ネットワークである。国レベルでのしっかりとかなネットワークである。確かに大英帝国としてみれば、イギリスは失う一方の過程を歩

「全体知」

への導火線

は、地図上で見ればイギリスを起点にして、大きく斜めに引かれる線として表れる。ロンドンの金融街シティから、ベンガル、シドニーを結ぶ線である。イギリスは今なお、そのラインを「エンジニアリング」として、巨大な力を行使しているというのが本書の主張である。著者は言う。

「世界史の中で見ると、英国は一九世紀半ばを頂点に、軍事

んできたし、そう見えるのはやむをえないところである。けれども、著者の言う「引き際の魔術師」（とても印象的な言い回しだ）としてのイギリスには、撤退した後にも強力なネットワークが残る。それが現代において絶妙に機能するというのが、タイトルにもある「ユニオンジャックの矢」である。「ユニオンジャックの矢」と

力、産業力において覇権を失い、どんどん凋落していつていくのかのように思える。しかし、同時に現在も国際社会の中で英国は隠然たる影響力を残していることにも気づかされるのである。それはソフトパワーとネットワーク力による影響力であることは強調してもしすぎることはない」

ネットワークから読み解くイギリスと世界全体の相関もさることながら、近世以降の日本とイギリスとの関係など歴史的な記述もとても興味深く読める。イギリスとの関係を見ることで、日本の歴史がまた異なる別の風景としてカラフルかつ立体的に眼前に立ち現れる。

また、イギリスのEU離脱（ブレグジット）をもたらし、歴史的背景などについても、通常のニュースなどの情報を手にするだけでは見えてこない、歴史的機微のようなものにもふれることができるのも魅力であろう。

けれども、本書の最大の持ち味は、著者自身のイギリスへの思いと言つてよいように思う。ところどころ、著者自身が40年にわたる英国とのつきあいのなかで眼にしたことや個人的感慨が記述される。それがまた、読み手のなかに再生されるイギリス像を色鮮やかなものにしてくれる。おそらく血の通つた視座をもつことは、全体を読むための最も有効な方法なのだろうと思ふ。

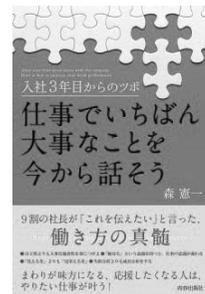
社会生態学研究者 森里陽一



『入社3年目からのツボ 仕事でいちばん大事なことを今から話そう』

森憲一 著

青春出版社 1400円＋税



社会人になって何が困ったか
と聞いて、それまで生きてきた
経験値が直接役に立たないこと
ほど困ったことはない。

そんなの当たり前と思われる
かもしれないが、決してそんな
ことはないと思う。学生までに
要求されること、社会人とし
て要求されることにあまりにも
断絶がありすぎて、慣れるまで
に相当な時間と労力を要したの
は確かである。

そのことは、社会人になった
ばかりの人にだけ関係のある話
ではない。世は高齢社会で、多
くの企業にとって人材不足は深
刻になっている。巨額の経費を
計上したのに、誰も採用に応募
してくれない、採用できてもす
ぐ辞められてしまうなどよく聞
く話で、「人が宝」の時代にな
ったのだ。

でもないことをさらにと要求す
るビジネス書がたくさんある。
成功者になるためにはこんなこ
とまでしなくてはならないの
か。あるいはこんなことができ
るくらいなら誰も苦勞しないと
思われるものが多い。

社会人のための「社会人入門」

時代でもある。
3年以内に会社を辞める若者
が多い理由はそこにあるだろ
う。昔から3年ものものは一
もつと言われるとおりで、最初
に掴んだ突端から次の高みを目
指さなければならず、それが全
身運動を伴うのは当然のことな
のだ。

本書はたてまえについては一
切書いていない。すべて本音、
あるいは裏側、さらにいえばか
らくりまでとても正直に書いて
いる。同時に、私はこの本をあ
る程度社会人経験のある人に読
んでほしいとも思うのであり、
なぜなら、私自身が本書からの
裨益を多く受けるものの一人だ
からである。

が読むべきだと思う。そして、
責任ある立場として次の世代を
育成する人々が手にするべきだ
と思った。

総力戦とは、頭の中の知識は
もちろん、もてるものはすべて
活用しなければならぬ試練の
時代に入る。

「もつと早く知っていたら少
しはましになっていたのに」と
嘆ずるのが人の世の常である
が、大事な知恵というものは
知ったときがいちばんの使いど
きなのだ。

私自身、今もつてできていな
いことのほうが多い。たとえ
ば「したたかに聞き流す」とか
「私」より「私たち」と考え
る」などはまったくできていな
いし、考えたことさえなかった。
この本は汎用性の高い、それ
でいて誰も教えてくれなかった
種類のアプローチを教えてください
ている。

そしてその種の知識は、こと
わざみたいなもので、マインド
の奥深くを刺戟してくれること
ろ、あるいはフレームそのもの
に働きかけてくれるところに価
値がある。

社会生態学研究者 森里陽一



『40代でシフトする働き方の極意』

佐藤 優著

青春出版社 840円＋税



自分が40代になってみてつくづく思うのだが、見たいものしか見なくなっているのを実感する。情報の回路もそれを解釈するシステムもある意味出来上がっていて、見方によっては頑健なのだが、レジリエンスに乏しいという気がしてならない。かねがね、「中年入門」みたいな本はないかなと思っていたけれど、この本が評者にとって格好の中年入門の役割を果たしてくれたので、紹介することにした。

とても親切な本である。細かいところに眼が届いていて、経験やエピソードも豊富で、読んでいて心がゆったりしてくる。それでいてしたたかで隙がない。「SNSに時間を奪われてはいないか」「会社関係の人脈は砂上の楼閣」「忙しくても自分時間を捻出す方法」「時間泥棒から自分を守る」

「40代にこそメンターが必要」「介護の問題から眼を背けない」

一つひとつ、しみこむような内容をもっている。きつとそれは直視すべきものを日々の多忙や雑事に紛れて、きちんと直視できていない後ろ暗さからくる

したたかで隙がない

のかもしれない。それに加えて、もしかしたら、現代は生きるということに伴う観念自体が大きく変化してしまった時代なのかもしれないと思う。人生百年時代というのが本当年的かどうかわからないが、少なくとも少し前までは人生は50年と言われていた。端的に言えば半分だった。かの吉田兼好も命多ければ恥

多しと言うくらいだから、長く生きることに、そして単なる物理的な時間のみでなく、膨大な情報やそれに伴う経験を膨味すれば、現代人は少なくとも情報レベルでは、百年前の人々よりはるかに長い人生を生きていると言ってもいいのかもしれない。本書で述べられていたのは、そのような長く複雑な人生を送るうえでの、リスクをヘッジするための考え方が多いように感じる。

たぶん40代というのは、リスクに対応しうるぎりぎりの年代ということなのだろう。あえて言えば、老年期というまた異なる海域に移行するうえでの航海の準備の期間なのではないかとも思われる。確かに40代にもなると人は変わらなくなる。何となく説教臭くなってくるし、考え方も急激に古くさくなる。対応力も落ち

てくるし、柔軟性に欠けるようになる。しかも、それらすべてにおいて鈍感になる。アフリカの部族に、年寄りは一つの図書館であるということわざがあると聞いたことがある。おそらくそれは役に立つ老人のことであって、残念ながらもすべての老人がそのようなものであるわけではないように思う。厄介になっているだけの老人だつて、残念ながらも自分にはない。しかも、自分がまさにそれになる危険性も少なからずある。

40代は淡水と海水の混ざる汽水圏であるから、そのための準備をきちんとしておくべきであるということになる。そのときに役立つのが経験豊かな人の助言であろう。

本書はまさしく助言としては理想的な条件を兼ね備えている。苦勞した経験から論ずるに、しかも低い目線から教えてくれる本から学べるのは、一人のメンターを得るくらいありがたいことだと実感させられる。